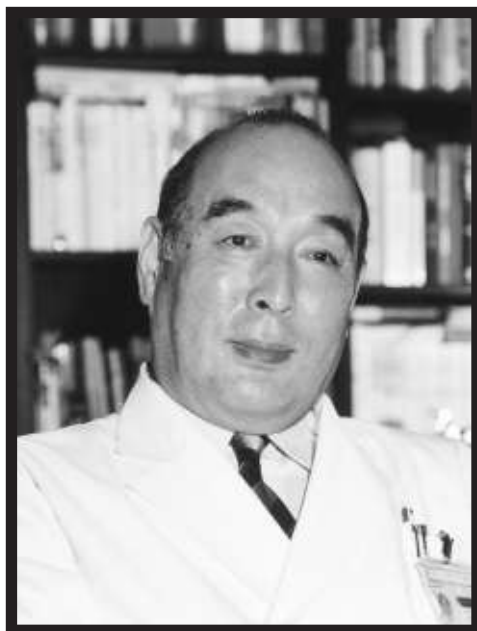


## 追悼



故 加藤暎一 先生 略歴  
(1924年5月13日生—2006年5月29日没)

### <学歴・職歴・主な活動>

- 昭和22年 9月 慶應義塾大学医学部卒業
- 昭和22年10月 慶應義塾大学医学部内科学教室入室(副手)
- 24年 1月 慶應義塾大学医学部内科学教室助手
- 30年12月 医学博士の称号を授与さる
- 35~38年 国立栃木病院内科部長
- 39~47年 慶應義塾保健管理室主任  
慶應義塾大学医学部内科兼担講師  
(腎臓・内分泌代謝科)
- 48年 4月 慶應義塾大学医学部内科助教授  
(腎臓・内分泌代謝科)
- 63年 4月 慶應義塾看護短期大学教授兼学長
- 平成 3年 3月 慶應義塾定年退職

### <留学歴>

- 昭和29~31年 ロックフェラー財団研究員として米国エール大学に留学。主として、水・電解質および体液調節の研究に従事

### <会長歴>

- 昭和56年 5月21~22日 第11回日本腎臓学会東部学術大会会長

日本腎臓学会名誉会員

## 加藤暎一先生を偲んで

慶應義塾大学名誉教授  
済生会中央病院特別顧問  
猿田享男

日本腎臓学会名誉会員であられ、慶應義塾看護短期大学教授・初代学長(平成2年3月退任)であられた加藤暎一先生は、平成18年5月29日午後0時50分、前立腺癌にて逝去されました(享年82歳)。先生は平成15年11月に脳梗塞を患われて体調を崩され、時々慶應病院に入院されておられましたが、そのときに前立腺癌が判明いたしました。その後前立腺癌の転移が進み、ご自宅において奥様の恵美子様をはじめ、ご家族の皆様方の手厚い看護にもかかわらず、他界なされました。心から哀悼の意を捧げさせていただきます。

先生は昭和22年9月に慶應義塾大学医学部を卒業され、直ちに慶應義塾大学医学部内科学教室に入室されました。神経伝導不滅の法則を発表された世界をリードする生理学者であられた御尊父の加藤元一先生の影響もあって、生理学にも大変興味を持たれ、内科学のなかでも体液調節機構、酸塩基調節機構といった生体の恒常性維持機構の臨床・研究に従事なされました。昭和29年から2年間ロックフェラー財団研究員として米国エール大学に留学され、水・電解質および体液調節の研究をさらに進められました。「放射性同位元素 P 32 を用いた磷の吸収、体内分布、排泄の研究」で医学博士の称号を授与されたのちは、Na および K 調節機構および浮腫の成因と治療の研究などに従事されるようになりました。

昭和38年慶應義塾大学医学部内科学教室の改組があり、これまでの3内科が5内科となり、消化器内科と腎臓・内分泌代謝科が新設され、浅野誠一先生が腎臓・内分泌代謝科の初代教授に就任されました。この腎臓・内分泌代謝科の内分泌代謝部門を松木駿先生が、腎臓部門を先生が担当され、新しい診療・研究・教育体制でスタートしました。腎臓部門には先生の下に山内真先生、小澤幸雄先生、澤藤瀧治先生、安掛操先生、石川丈之先生、小川勝先生、和田孝雄先生ら、特に腎生理に興味をもたれる方が集まりました。昭和40年には先生と山内真先生の共著で、文光堂から「体液バランスの基礎と臨床」という一般臨床医向けの水・電解質に関する名著を上梓されました。当時、水・電解質に関するわかりやすいテキストがなかったため大変好評でありました。

先生は大変博学で、英語も堪能であられましたことから、腎臓研究室では最新の世界の文献がすぐに紹介され、また Pitts 教授著の「The Physiology of the Kidney」を用いた腎生理の勉強会も行われ、大変学識レベルの高い研究室と評価され、多くの若い先生方が先生の下に集まるようになりました。研究室では、Na 利尿因子、酸塩基平衡、急性腎不全の成因や利尿薬の作用機序に関する研究が行われ、活気のある研究を指導されておられました。ただし、先生は頭の回転が速いうえに最先端の論文に目を通しておられましたので、先生と議論するのが大変で、ついていくのがやっとでした。各グループの研究では、理論が先に進み、実際の実験進行が遅れてしまうこともありました。

先生は、水・電解質調節、酸塩基平衡、利尿薬などに関して、腎臓学会、内科学会、医師会などで特別講演やシンポジストとして大変活躍され、昭和56年には会長となられて第11回日本腎臓学会東部学術大会を腎臓研究室総出で開催なされました。東部学術大会開催後も、腎生理研究会、東京体液研究会、浮腫や利尿薬および水・電解質の研究会やシンポジウムを開催されて活躍されておられましたが、昭和63年に

慶應義塾に新設された看護短期大学の学長・教授に就任され、看護教育にも貢献されるようになりました。

平成3年慶應義塾大学定年から喜寿を迎えられるまで、腎臓・内分泌代謝科のカンファレンスに出席していただき、腎臓、さらに一般内科の幅広い領域の最新の論文に基づき、また豊富な臨床経験から、私どもに貴重なアドバイスをしてくださいました。

平成15年11月に脳梗塞を患われる少し前、先生が初代学長を務められた短期大学が4年制大学へ移行することとなりました。その閉校の記念誌に先生が寄稿なされた原稿はいかにも先生らしく、それを紹介させていただきます。

「私も去年77歳の喜寿を迎えましたが、人間は108の鐘の音とともに新しい年を迎えます。108歳は「茶寿」とも言いますが、草冠を二十に見立て、下の部分の八十八を加えて108歳というわけです。“茶を寿ぐ”古来から飲茶が長寿の秘訣という知恵を、言葉に託して伝えてきました。Health is above wealth “健康に勝る富はない”というわけです。

健康な生活の条件として、従来は“快食、快眠、快便”といわれました。私はこれに“快飲、快声、快話、快笑、快汗、快尿、快精(性)”を加え、日々その実践に努められることを勧め、そしてモーゼの十戒ならぬ“加藤の十快”と呼んでいます。さらに最近の日本人には、ゆとりが不足しているので、快遊を追加したいと思います。」

先生のこの文章は、いつまでも私どもの心に残ると思います。先生どうぞ安らかにお眠りください。